

手づくりの棺桶自分で入ってみる

天竜区で「手づくり葬」に取り組んでいる田中康彦さん(76歳)を訪ねた。田中さんの奥様の余命はあと10日くらいと聞いた。医療は、治るために行うもの。治る見込みのない医療というのは、患者に負担を強いるだけ。ということで、奥様はターミナルケアに入った。もはや点滴もしない。水も断っている。「枯れていくように、安らかにあの世に旅立ってもらおう」と。奥様は60代前半からアルツハイマーにかかり、田中さんは、以来、お世話されてきた。後半は施設にあずけているが、よく訪ねてやり取りをしていた。安らかに看取ること、安心のなかで往生してもらうこと。田中さんは、心をこめての「手づくり葬」に向けて作業をしている。まずは、いま棺桶を製作中。カヤックを手づくりしている田中さんならではの腕前。「浮かべて、そのまま川に流し、そして太平洋に漂いながら朽ちていくのもいい」という。棺桶といっても曲線のカーブがとてもいい。蓋もつくる。周りに般若心経を写経した自分で漉いた和紙を貼る。骨壺は友人に制作してもらった。遺骨が土に還るように杉で作った。葬儀そのものは、お坊さんも呼ばない。お経も必要ない。遺影の額も手づくり。奥様の好きだった井上陽水の「少年時代」を流す。そして、カタロニア出身のチェロ奏者、パブロ・カザルスの「鳥の歌」。参列者は親しい身内だけ。柩は、田中さんが近くの斎場まで運ぶ。遺灰は、手元供養として、手づくりの木製の壺を作る。なにからなにまで「手づくり」で心がこもる。親しい人の死を「看取っておくる」という原点を考えさせられる。

問い合わせ:080-5412-6370(池谷)
 浜松市北部生きがい特派員 池谷 啓

子どもは船とってはしゃいでいる山里と棺桶